

別寒辺牛湿原におけるエゾシカによる湿原植生への影響について

酪農学園大学大学院

酪農学研究科 食生産利用科学専攻

佐藤瑞奈

【要旨】

日本全域でニホンジカの個体数増加に伴う分布の拡大が問題となっています。ニホンジカの個体数増加は森林やそこに生える草への影響だけでなく、湿原の植物や環境の攪乱を引き起こすことが報告されています。主な影響としては、食害、掘り返し、踏みつけることによる土壌の攪乱などです。厚岸町近隣の釧路湿原や霧多布湿原でも同じような事例が報告されており、別寒辺牛湿原でも同じような影響が起きることが考えられ、今回植生調査とシカによる採食や痕跡がないか調査を行いました。

調査方法は 1999 年に調査された方法をもとに 2m×2m の調査区 20 個と 10m×10m の調査区を 4 個設定しました。記録項目は発見した植物種、植物の高さ、どの割合で生えているかを記録しました。さらにシカに食べられているか、踏みつけられているかについても記録しました。

結果、60 種類の植物が生えていることを確認しました。そのうち環境省レッドデータブックに記載のある種が 4 種ありました。15 種がシカに食べられており、調査区 24 個のうち 5 個にシカの踏み跡、14 個に食べられた痕を発見しました。

一般的に高層湿原の植物はシカに食べられることよりも踏まれる影響の方が大きいのではないかとされていますが、今回の別寒辺牛湿原の調査では食べられている痕跡が多い結果となりました。植物がシカに食べられて起きる影響としては生える種類の減少、シカが食べない植物の増加などたくさんの事例がありますが、踏まれて起きる影響のことについてはあまり調査されていません。今後は、踏まれることの影響についてと過去の調査結果と比べどのような変化があるか調べていく必要があると考えられます。また、別寒辺牛湿原周辺にどれくらいシカが生息しているか、どこを利用しているかなどの調査も必要になってくると考えられます。